LIXIL Ushioda East Asian Humanities Initiative

Humanities Center

「企画研究」報告書

2022 年 7 月 15 日

1. 基本情報

研究代表者　氏名：松方　冬子	所属部局：史料編纂所
題目（和文・英文）	
（和文）　行動する人の歴史：力はどこからくるか （英文）　The History of People Who Act: Where Does Power Come From?	
概要	
本研究は、人間とは何をして生きるものかという素朴な疑問から出発し、日本・アジアから新しい世界史を構想しようとした。動詞をキー概念として用いることにより、従来歴史学を縛ってきた時間・空間設定（「近世日本」など）から個々の事象を解き放ち、多角的な議論と歴史の動態的把握を可能にすることを目的とした。とくに権力を生み出す行動を表す動詞に着目し、歴史学の得意分野である権力論をさらに深め、豊かにすることを目指した。本研究の遂行は、狭い学問分野のなかでは不可能であると考え、複数部局を横断した人文学ならびに連携により、公募研究フェロー（経験者）を中心に、今までのHMC企画研究の蓄積にも学びながら研究を遂行するように努めた。正規のメンバー以外にライター（江口絵理氏）の参加を得た。オープンセミナーには、多くの学生さんのご参加を得、積極的な質問も出された。広い意味での教育効果はあったのではないかと思う。	

2. 研究分担者

研究分担者	所属機関・職位
松方　冬子	史料編纂所・教授
研究分担者	所属機関・職位
稲田　奈津子	史料編纂所・准教授
研究分担者	所属機関・職位
三枝　暁子	人文社会系研究科・准教授
研究分担者	所属機関・職位
井坂　理穂	総合文化研究科・教授
研究分担者	所属機関・職位
後藤　春美	総合文化研究科・教授
研究分担者	所属機関・職位
永井　久美子	総合文化研究科・准教授
研究分担者	所属機関・職位
水野　博太	ヒューマニティーズセンター・特任助教

3. 研究成果

【書籍】
松方冬子、水野博太、後藤晴美、井坂理穂『Humanities Center Booklet Vol. 13 語る力が権力を作る？—歴史からの問い—』 東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター、2022 年
2021 年に開催したオープンセミナー「語る力が権力を作る？—歴史からの問い—」の発表内容およびコメント・ディスカッションの内容を記録した。
Matsukata Fuyuko, Bhawan Ruangsilp, Dhiravat na Pombejra, JUNG Donghun, KOO Bumjin, *Humanities Center Booklet Vol. 16, Royal Letters, Imperial Documents: A Japanese, Korean and Thai Trialogue for a Global History of Inter-State Relations,* 東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター、2022 年 6 月
2019 年 11 月に開催したオープンセミナー特別回”Royal Letters, Imperial Documents”の発表内容を記録した。

【口頭発表】
東京大学ヒューマニティーズセンター第 38 回オープンセミナー「語る力が権力を作る？—歴史からの問い—」
2021 年 7 月 9 日、オンライン開催
基調報告・趣旨説明：松方冬子
報告：水野博太「福澤諭吉における「会議」と「演説」」
後藤晴美「WINSTON CHURCHILL：戦う人、語る人」
井坂理穂「M.K.ガーンディーの「語り」」
「動詞」を起点に歴史学を捉え直すという本企画研究コンセプトについて、まずその趣旨と可能性について研究代表者が説明した。ついで「語る」という動詞をキーワードとして、三名の参画教員がそれぞれの専門性に拠りながら報告を行った。
松方冬子「日本の歴史学は今まで何をしてきたのか」Faculty of Asian and Middle Eastern Studies、the University of Cambridge, the United Kingdom, 10 May 2022
歴史学にとどまらず、人文学の過去と未来を考える講演を行った。
Matsukata Fuyuko, ″Toward a Global History of Diplomacy: An Attempt to Break Down Europe’s ‘City Wall’,″ online, hosted by the GHCC at Warwick University, 16 March 2022
歴史学にとどまらず、人文学の過去と未来を考える講演を行った。

【その他】
本研究に関するウェブサイト（下記）の運営
https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/personal/fuyuko/kaken/koudou_rekishi.html

4. 今後の研究の展望

本研究は、挑戦的な歴史学の未来図を描いてみようという企画であったが、コロナ禍により当初からオンラインで研究会を開催せざるを得ないという状況下でもあり、残念ながらメンバー内部での意見交換・意思の疎通で精一杯であった。冒頭に提示した全体のコンセプトを自分の研究に引き付けてお互いに事例を提示するところまでは順調にいけるのだが、全体のコンセプトを議論するとなると、とくに日本史（古代史・中世史）と外国史・思想史（19～20 世紀史）との間で見えている世界や意識の違いが大きいように思われた。それぞれの学問分野の違いは強固であり、それを相対化するだけの個人的な信頼関係を築くことは短時間では難しいというのが率直な印象である。「ローコンテクストな動詞をキーにしよう」という趣旨で研究会を組織したが、後半近くになって「民衆」や「権力」などの名詞の意味合いについてメンバーの認識の違いが浮き彫りになった。アカデミアの外にはみ出していくような歴史学を考えたいと思ったが、その趣旨が東大教員のネットワークづくりを重視する HMC 企画研究という枠組みとあまり合致していなかったのかもしれない。さまざまな課題が浮き彫りになった 2 年間であった。